Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-06-25

二、三木家と柳田國男 : 地域歴史文化の視点から読み解く民俗学の故郷(II 中世・近世編 ふくさきの歴史遺産をひも解く : 地名や地域に残る古文書から)

山﨑, 善弘

(Citation)
共同研究「福崎町の地域歴史遺産掘り起こし及び大庄屋三木家住宅活用案の作成等」(ふくさき再発見～歴史をたずねて～ : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター平成23年度活動報…

(Issue Date)
2012-03-28

(Resource Type)
research report

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81003854

二、三木家と柳田國男
――地域歴史文化の視点から読み解く民俗学の故郷――

山﨑　善弘

はじめに

柳田國男といえば民俗学者、しかも日本民俗学を樹立した学者として広く知られる人物です。しかし、彼が日本民俗学を樹立するに至った背景については、十分に明らかにされていないのが現状です。

私はこの点を知る上で、國男が神東郡田原村辻川の出身であることに改めて注目する必要があると思います。國男が後に民俗に関心を持つ上での大切な経験を積んだ場所として、これまで以上に辻川に注目する必要があると考えているのです。そして、その際、三木家との交流は外せない重要事であると考えています。

本章では、こうした問題関心に従って、三木家と柳田國男の関係を明らかにしたいと思います。

（1）　三木家――地域文化の担い手

三木家は辻川に居を構えた大地主で、近世には姫路藩の大庄屋を務めるとともに、地域文化の担い手としての役割も果たしていました。これら両側面のうち、本節では、後者の側面について見ましょう。

1　三木家の好学の風

三木家の好学の風については、すでに『福崎町史』第二巻　本文編Ⅱ（兵庫県福崎町、一九九五年）において詳細に述べられています。以下では同書を参考にしながら、同家の好学の風について概観しましょう。

三木家は、明治初年までに雑多な分野の和漢の書四〇〇〇冊余の蔵書を伝えました。それぞれの必要に応じて集められたものですが、そのこと自体が三木家の学芸への大きな関心をうかがわせるものであることはいうまでもありません。

ただ、三木家がその歴史の全期において学芸への大きな関心を持ち続けたということではないようです。四代有敬（武七郎）（享保九年～安永八年〈一七二四～七九〉）までは、学芸への関心をうかがわせる史資料は現存していません。五代通庸（甚右衛門）（宝暦五年～文化八年〈一七五五～一八一一〉）以降になると、大庄屋として姫路藩の地域支配に携わるだけでなく、教養人として地域文化の担い手としての役割を果たすようになりました。そして、続く六代通明（東作〈藤作〉）（天明二年～天保一五年〈一七八二～一八四四〉）、七代通深（種之助・慎三郎）（文政七年～安政四年〈一八二四～五七〉）までが、特に学芸への大きな関心を示していました。

三者は、いずれも京都・大坂に赴いて皆川淇園・中井竹山らの学者に師事しました。通庸はその後、川辺村の医師中川子文に頼んで漢籍について講じてもらい、柳田國男の曽祖父松岡義輔をはじめ、周辺の人々に聴講を勧めました。また、講義が終わった後には、互いに漢詩を賦して楽しみました。こうして地域の知識人との交流を深めていました。通明は一一歳の時に懐徳堂の中井竹山に師事したと伝えられ、四年間、懐徳堂で学びました。その際、竹山は多忙な時間を割いて、通明のために『穀雨』（手習いの手本を一七〇枚にまとめたもの）『蒙養編』（手習いの手本とともに、学習と日常の心得を諭し、往来物風に仕立てたもの）を手書きして与えています。これらは通明の学習に重要な指針を与えたものでした。彼は帰郷後も近郷の学者に師事し、勉学に励みました。続く通深は、幼少期から非凡な才を発揮し、それを見抜いた父通明は、幼年期から通深に詩や書画の教育を行いました。その結果、通深は三木家の好学の風を代表する逸材として活躍することになったのです。

２　文化人としての通深

ここでは、文化人としての通深の活躍について見ましょう。

通深は三四歳の短い生涯を送りましたが、大庄屋を務める傍ら、文化的部分では多面的かつ精力的に活躍した人物でした。

まず、通深の文人画家としての側面について見ましょう。

通深は三人の絵師と交流を持ちました。その一人は姫路の島琴陵で、天保二年（一八三一）から同一〇年（一八三九）にかけて、通深は琴陵から指導を受けています。琴陵は一回につき五、六日から一〇日前後、三木家に滞在して画を教え、八年間に合計二一八日に及ぶ滞在を重ねています。また、天保四年（一八三三）には、江戸の東朧（上杉墨水）が城崎での湯治へ向かう途次、三木家に立ち寄り、その帰路にも約二カ月間、同家に滞在しています。その間、通深は東朧から画の指導を受けたようです。その後も東朧はしばしば同家を訪ねており、その際にも、通深は東朧から指導を受けたのでしょう。さらに、天保九年（一八三八）には、通深は京都の浦上春琴から指導を受けています。春琴は山水画、花鳥画に優れ、中林竹洞や山本梅逸らと名声を競った文人画家です。天保九年に春琴は姫路に訪れていますが、姫路藩士の下田重次郎からその旨を知らされた通深は、同年九月一〇日から姫路に行き、春琴に入門しています。そして、町宿に逗留して、春琴の逗留先である坂田町の善導寺に通って稽古をつけてもらっています。同月二五日に帰宅しているので、約二週間姫路に逗留し、春琴の元に通ったのです。また、一〇月三日に姫路に行き、同月二一日に帰宅しており、再度二週間以上にも及ぶ期間、通深は春琴に稽古をつけてもらったのです。春琴ほどの文人画家に稽古をつけてもらうことなどめったにあることではなかったでしょう。見方を変えれば、通深の書画の腕前が、春琴をして稽古をつけるにたるほどのものと判断させたことを物語っているともいえるでしょう（山﨑善弘「三木家と姫路藩主・元家老との文化的交流について」『神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター　平成二二年度活動報告書　共同研究「辻川界隈の地域歴史遺産掘り起こし及び三木家住宅の活用基本構想作成」』（神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター、二〇一一年）（写真1参照）。

写真１

三木通深筆山水画

（三木家所蔵）

次に通深の学者としての側面について見ましょう。

天保九年三月、通深は父通明に従って畿内周辺への旅に出発しますが、同月二六日に懐徳堂を訪問し、教授兼預り人であった中井碩果に謁見を許されています。そして翌日に碩果へ入門しています。通明・通深父子はそのまま旅を続けていますが、その後も通深は懐徳堂へ出入りしました。そのことを具体的に示す史料は少ないのですが、例えば、天保一〇年のもとの思われる碩果から通深宛の書状（『福崎町史』第四巻 資料編Ⅱ、兵庫県福崎町、一九九一年）には、次のようにあります。

然ハ画巻拙作相認差上候二付、菓子一折被為懸貴意不浅忝奉存候、東征稿并貴草差上候、慥御落手可被下候、但し危言有故他向へ出不申候、乍気毒得御用立不申候、何卒他日出坂被成候砌御蔵本持参書院二て校讎被成可然候

碩果の作成した画巻とともに、中井竹山『東征稿』が懐徳堂から通深に貸し出されたことが知られます。その際、通深は中井竹山『草茅危言』の貸出しも頼んだようですが、これは貸出しを禁じているので、他日懐徳堂で校讎するようにと断られています。通深が懐徳堂に出入りしていたこととともに、彼が勉強熱心であったことが伺えます。

また、三木家の人々は但馬国出石藩儒桜井家と親しい関係にあり、特に東門から通深はしばしば詩文の添削を受けまし

た。

もう一点、注目しておきたいこととして、天保期（一八三〇～四四）末には、通深は昌平坂学問所に入学し、学んだことが挙げられます。通深が学問所においてどれだけの期間学んだのかは明らかではありませんが、通常、農民が入学することはできない教育機関において、入学が許され、学んだことは、彼の学力の高さを物語る出来事として特筆すべきことでしょう。

写真２　松岡小鶴画像

『福崎町史』２　本文編Ⅱ

（兵庫県福崎町、1995年）より引用。

最後に、通深の地元での交友について見ましょう。

通深の知友は姫路、生野を含めた近隣地域に少なからずいました。そのうちの一人が神東郡辻川村（後に同郡田原村辻川）の松岡小鶴（写真２）でした。彼女は柳田國男の祖母に当たる人物（図１）で、通深と親しく交わりました。彼女は医術・儒仏などに通じ、通深と儒仏の論争を展開することもありました。

小鶴の父は辻川村の医師松岡義輔で、既述のように義輔は三木通庸の詩友でした。したがって、三木家と松岡家との交流は通庸の代から続いていたものと思われます。例えば、通深が義輔の元へ入学し、手習いを受けている（大庄屋三木家文書）ことは、そのことを示しています。ただ、通深の代でそのあり方は、とりわけ学問的交流という色彩を帯びるよう

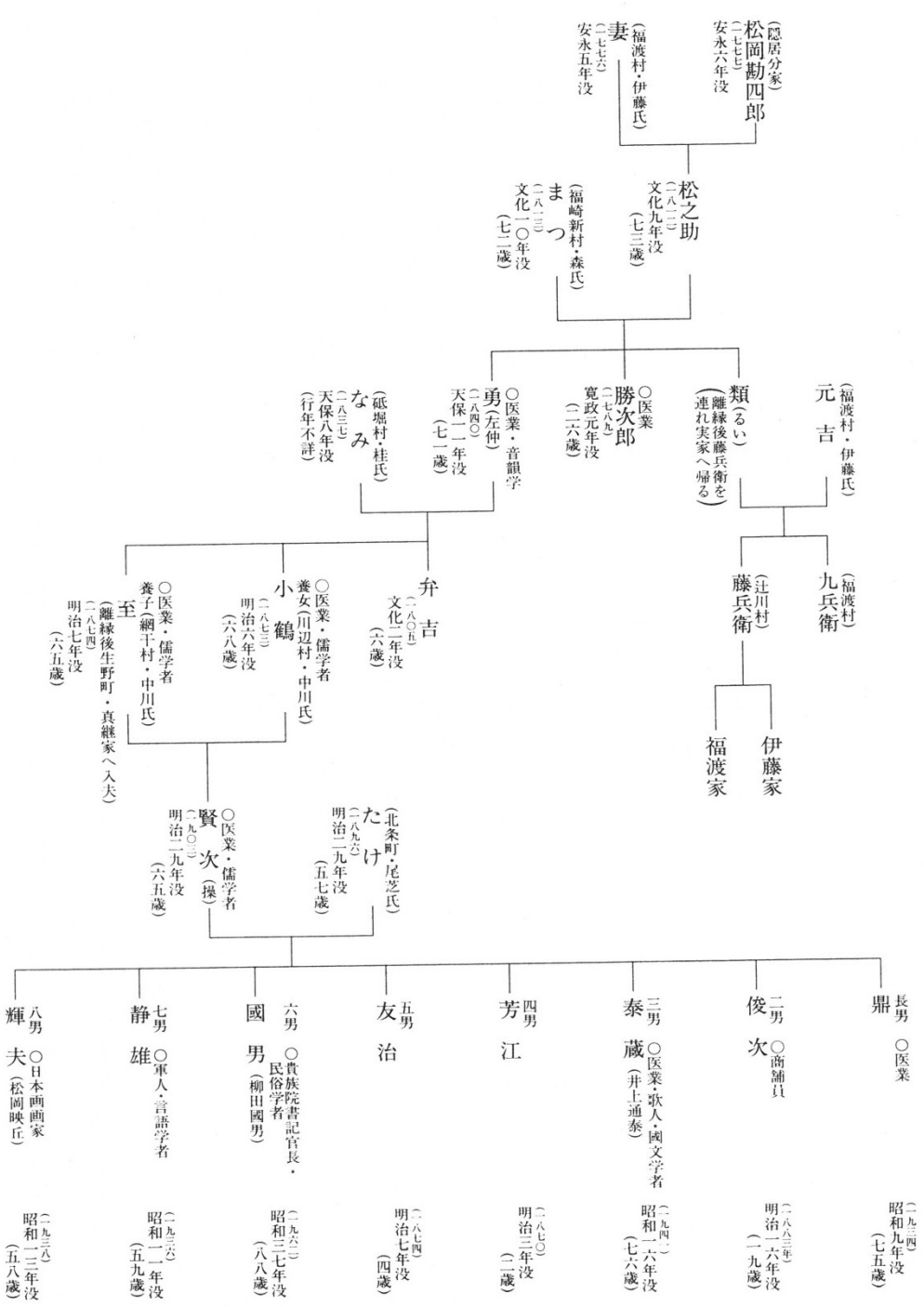

図１　松岡家家系図

『福崎町史』２　本文編Ⅱ（兵庫県福崎町、1995 年）より引用。

になったところが注目されます。そして、その後も三木家と松岡家との学問的交流は続いていきました。

（２）　松岡家――医者・儒学者の家

続いて松岡家について見ましょう。

改めて小鶴に注目したいと思います。松岡家は医者・学者を輩出しましたが、本格的に学者の道を歩んだ最初の人物は小鶴であったといえます（父義輔は儒学者の道を選びましたが、兄で医者の勝次郎が二六歳で死亡したため、やむを得ずその後を継ぎました）。

小鶴は医術にも通じていましたが、むしろ儒学者としての道を歩んだ人物でした。そして、彼女は一子賢次（後に操と改名）を儒学者として大成させようとして厳しい教育を行うことになります。

操は一三歳で学に進み、翌年、姫路藩家老の河合寸翁が設立した仁寿山校に入学しました。その後、彼は藩校の好古堂に入学しましたが、退学します。そこで、医術を学び、二七歳の時に辻川村で開業しました。その後も彼は勉学に励み、好学の士として遠近にその名を知られるようになり、文久三年（一八六三）、三二歳の時に姫路藩の町学校熊川舎の舎監として迎えられました。

（３）　三木家と幼・少年時代の柳田（松岡）國男

松岡操が優れた儒学者となりえたのは、もちろん本人の努力の結果ですが、彼が小鶴の優れた資質を受け継ぐとともに、彼女の厳しい教育を受けた結果でもあるでしょう。そして、操の子供である鼎・泰蔵・國男・静雄（図１）も、祖母小鶴と父操の優れた資質を受け継ぎ、医者・学者としての道を歩むことになりました。操は特に子供たちに厳しい教育を施したというわけではないようです。だからといって、祖母と父の資質を受け継いだことだけに、鼎・泰蔵・國男・静雄が医者・学者の道を進んだ原因を求めることには少々無理があるでしょう。義輔の代から三代にわたって築き上げてきた松岡家の好学の風が、彼らが医者や学者を目指す基盤となったのではないでしょうか。現在でも代々医者や学者を目指す傾向にある家がありますが、そのような家には共通して好学の風という、いわば家の文化があるといえるでしょう。松岡家の場合も同様で、義輔の代から四代目で、その文化の花は大きく咲き誇ったわけです。

さて、操の子供のうち、学者として最も名をはせたのは國男でした。本節では、彼に焦点を絞って論を進めましょう。

國男は辻川で幼・少年期を送りましたが、優れた記憶力を持っていたと伝えられています。このことについては、彼自身もその著作『故郷七十年』（新装版）（神戸新聞総合出版センター、一九八九年）の中の「兄嫁の思い出」の項で、次のように述べています。

子供のころの思い出はつきない。私の家は貧しかったため、私にも方々から小僧に貰いうけようという話がかかった。

（中略）私が暗記力にすぐれていたため、お寺から貰いうけの話が出たのだろうが、両親もお寺にやるならば、京都の大きな所と考えていたのであろうか、幸い実現はしなかった。

國男の記憶力があまりに優れていたため、寺に弟子入りさせたいという希望が、近隣の幾つかの寺院からきたことがうかがえます。祖母と父の資質を受け継いでいたことを物語る一文といえるでしょう。この優れた資質の上に、次第に学問の道へと歩を進めていくことになります。

國男は一〇歳の時に加西郡北条町へ移りますが、その翌年の明治一八年（一八八五）に飢饉に遭います。彼は『故郷七十年』の中の「饑饉の体験」の項で、そのことについて次のように述べています。

饑饉といえば、私自身もその惨事にあった経験がある。その経験が、私を民俗学の研究に導いた一つの動機ともいえるのであって、饑饉を絶滅しなければならないという気持が、私をこの学問にかり立て、かつ農商務省に入らせる動機にもなったのであった。

北条町での生活が、その後の國男の進むべき道に影響を与えたことは間違いないでしょう。

ところが、國男は『故郷七十年』の中で、それほど北条町については詳細に語っていません。もちろん、彼にとって北条町は故郷の一つであり、その後に移り住んだ茨城県北相馬郡布川町もしかりでしょう。しかし、彼にとっての第一の故郷はやはり辻川であり、同地について存分に語っているのが『故郷七十年』ということになります。

三木家との交流については、國男は『故郷七十年』の中の「幼時の読書」の項で、次のような注目すべき発言をしてい

ます。

拙二氏の祖父に当る慎三郎という人は、農家に似合わず学問好きな人であったらしく、三十数歳で早世したが、大阪の中井竹山の系統を引く学者であったから、同家の裏手にいまも残っている土蔵風の建物の二階八畳には、多くの蔵書があった。そして階下が隠居部屋で二階には誰も入れないことになっていたのだが、私は子供のことだから、自由に蔵書のある所へ出入りして本を読むことができた。あまり静かなので、階下からおじいさんが心配して「寝てやしないか」と声を掛けることがあったほど、私はそれらの蔵書を耽読した。その間はいたずらもしないので、家人は安心したのであろう。いろいろな種類を含む蔵書で、和漢の書籍の間には草双紙類もあって、読み放題に読んだのだが、①私の雑学風の基礎はこの一年ばかりの間に形造られたように思う。

私はこの三木家の恩誼を終生忘れることができない。

当時、國男は北条町に住んでいましたが、一時、父の友人である三木通済（承太郎）の家に預けられたことがあります。この一文はその時のことについて述べられたものです。

続いて、同書の「南望篇」の項の中の発言も見てみましょう。

この文集（小鶴による漢文集『南望篇』―筆者注）には、まだ他に「三木公逢に与えて仏を論ずるの書」というのもある。これなどは、いまなお私が興奮を覚えるほどの大文章で、あて先の三木公逢は村の大庄屋の若主人、すなわち私が一生親しくしてもらった三木拙二翁の祖父である。すぐれた素質の青年であったかと思われて、若いころに大

阪に出て、中井竹山先生の門に入って研学し、莫大な文庫を留めておられるが、学問が過ぎたのであろうか、三十いくつという盛りの年に世を去って、幼い一人子が後に残った。それが拙二翁の先代の承太郎さんである。

②虚弱で、いたずらで、小生意気な十二歳の少年が、どうして一年足らずでもこの家に預かってもらえたのか、いま考えてみてもその動機がはっきりしない。拙二翁はその頃、たしか神戸の良い学校に入れられて家にはおらなかったが、あとには妹たちがたくさんいて、少しも寂しいことはなかった。

私の父は、この家の莫大な蔵書を良く知っていて、自分が不自由をするにつけても、毎度そのうわさをしたけれども、家も離れていたのでそうひんぴんと出入りする風はなく、それに、仕事の必要から、いつも五里、三里と外歩きをしていたので、めったに、この家の集まりに参加することもなかった。母などは多分一生の間しみじみとあいさつをしたこともなかろう。③それがたった一度の頼みで、この厄介者をひきうけてくれたことは、いま考えても不審のようであるが、これは多分学問への大きな愛情と、つぎには主人の判断を重視した、前々からの家風であったろう。そう思って、いつまでも私は三木家の先代の人柄を懐しがっているのである。

二つの発言は、國男が子供の頃に関するものです。当時、彼が明確に民俗学を志すというような気持ちを抱くことはまだなかったでしょうが、三木家との交流が、彼の学問への関心を芽生えさせる上で大変大きな役割を果たしたがことが知られます。

従来、國男の民俗学研究への動機は、茨城県北相馬郡布川町の地蔵堂に掲げられた「間引絵馬」を見た印象からなどと

説かれ、辻川での体験に注目されることはあまりありませんでした。しかし、いま見た二つの発言からは、辻川での体験が重要な位置を占めていることは明らかです。

傍線部①に注目しましょう。誤解を恐れずにいえば、民俗学は民族文化を明らかにしようとするために対象が広く、雑学風の要素を持つ学問です。特に國男の民俗学にはそのような傾向が見られます。彼の祖母や父が学んだ儒学、そして彼の兄弟の泰蔵が学んだ国文学、同じく静雄が学んだ言語学とは性格が異なります。その意味では、國男は松岡家の学者たちの中では異色な存在であったといえます。そして、他でもなく、その性格は三木家との交流に起因を求めるべきでしょう。言い換えれば、三木家との交流こそが、彼の民俗学研究の基礎を形成したといえるでしょう。

そして、三木家と國男との交流は、一朝一夕に実現したものではないことに注意を払う必要があります。傍線部②を読むと、國男は三木拙二と友人ではあったものの、一年足らずとはいえ、なぜ自分が三木家に預かってもらえたのか、その理由を明確には理解できていません。しかし、傍線部③にあるように、おおよその見当は付いていたようです。つまり、三木家と松岡家の好学の風と、そのことに基づいた両家の学問的交流が背景となっていたことを。二つの発言に登場する人物のうち、三木慎三郎と三木公逢は同一人物で、前節で詳しく見た三木通深その人です。三木家と松岡家との学問的交流の起点となったのが、通深と小鶴との交流であったことは既述の通りです。そして、國男の発言からは通済と操の代まで両家の学問的交流は継続していたことが分かります。詳細は明らかではありませんが、例えば、三木家には明治初年に作られた『蔵書目録』が残されており、これは操の手になるものであることが研究者によって指摘されています。両者の

学問的交流が密であったことをうかがわせます。

民俗学者・柳田國男の誕生にとって、三木家との交流が大変重要な要素であったことは間違いありません。そして、國男と直接接点があったわけではありませんが、通深は外せない重要な存在でした。三木家と松岡家との学問的交流が通深を起点に始まることと、彼が耽読した三木家の蔵書の多くを、通深が収集したことからも、それは歴然としています。

（４）　民俗学者・柳田國男にとっての辻川

民俗学者・柳田國男が誕生するに当たって、彼の辻川での経験が大変重要なものであったことを見てきましたが、成人し、民俗学者となった彼は辻川についてどのような想いを抱いていたのでしょうか。ここでは、この点について若干の検討を行いたいと思います。

従来、この点については否定的な見方をする向きがあり、『福崎町史』第二巻　本文編Ⅱにおいても、國男が辻川を故郷としてはあまり重視していないというような記述が散見されます。儒学者の家風と辻川の一般人との間に隔たりがあったこと、彼が郷里を後にして帰ってこなかったことなどがそれです。確かに、それらは事実です。しかし、彼が辻川を嫌っていたわけではありません。

明治三三年（一九〇〇）、國男は東京帝国大学法科大学政治科を卒業、農商務省農務局に入りました。翌年、彼は柳田家の養子となり、柳田國男と名乗るようになります。彼は官吏として多忙な日々を送っていましたが、大正二年（一九一

写真３　三木拙二宛柳田國男絵葉書

三）に雑誌『郷土研究』の刊行を開始し、郷土史家、郷土研究家の寄稿を求める他、自ら多くのペンネームを用いて論文や見聞を執筆し始めました。そのペンネームの大半は辻川界隈の親族や知人、また柳田家の親戚に関わるものでした。

この点について『福崎町史』第二巻　本文編Ⅱでは、「どのような國男の意図からでたものであろうか」と疑問を呈していますが、私は素直に彼の望郷の念が色濃く表れたこととして捉えるべきだと思います。そして、ここからも彼の学問的背景が何であったのかが物語られていると思います。

最後に、國男と三木拙二との交流について見てみましょう。先述の通り、拙二は國男の友人でしたが、単なる友人というのではなく、故郷での知友というべき人物でした。二人の交流はお互いの晩年まで続きます。この度、新たに発見された絵葉書（大庄屋三木家文書）の文章を次に掲げます（写真３参照）。

いよ〳〵春になり申居候、冬中皆様御障も　不被為入□□由、小生寒さの間伊太利をあるきをり、昨今ヴェニスの町にまゐりをり候、今半歳ほとハ尚欧羅巴にてくらさねバならず候、骨ばかり折れ申候故、たま〳〵ハかへりたくなり申、且□様によろしく御申上候

十一月三十一日　ヴェニスにて　柳田國男

これは大正一二年一一月三一日、おそらく國男が朝日新聞社客員としてイタリア（伊太利）に出張した折りに拙二宛に郵送されたもので、あと半年ほどはヨーロッパ（欧羅巴）で暮らさねばならず、骨ばかり折れると漏らしています。そして、末尾で、たまには辻川へ帰りたいと記しています。同様の趣旨の書簡類は他にも残存しています。

國男にとっての辻川の持つ意味を再認識する必要があるのではないでしょうか。彼にとって最も重要な故郷は辻川だったといえるでしょう。『故郷七十年』には辻川の明治初年の人や風景がいきいきと述べられていることからも疑いはありません。そして、その故郷とは、彼の民俗学研究の基礎を形成した場所であり、その意味で、彼はとりわけ三木家との交流をいつまでも大切に想っていたのです。

おわりに

本章では、とりわけ三木との関係を重視し、柳田國男が民俗学研究の基礎を形成した場所として、改めて辻川に注目し

ました。

三木家の好学の風は、地域のそれを誘発する核になっていましたが、その面での通深の役割は大きなものでした。そして、彼の交友関係の一つに松岡小鶴との学問的交流があり、その後も継続した両家の学問的交流が、民俗学者・柳田國男が世に生まれ出ずる契機となったのでした。積み上げられた地域の歴史文化を基盤に民俗学者・柳田國男は誕生したといえます。

今後も「三木家と柳田國男」についての研究をさらに進めていきたいと思っています。そのことは、民俗学者・柳田國男についての研究を深めていくことであると同時に、彼が福崎町出身の文化人であることからすれば、福崎町の歴史文化をより深く理解することにもつながるでしょう。